



## 第82回（平成25年2月13日）定例会の研究発表要旨

### 軽川小と共に歩んだ～岩田利雄先生を語る

前田 鈴木 清士 氏

昭和4年、当時の下手稲小学校長宅に赴任前の挨拶に行った時、校長から「当校には欠員がないので何かの間違いだらう」と言われ、泣き出しそうになった20歳の男が、青春の18年間を生徒や先生、父兄と苦楽を共にし、情熱を燃やし続けたその足跡を辿ってみた。

#### 1 軽川小の校名・校舎の変遷

明治17年開校以来、140年の歴史を刻む手稲中央小学校も、学制改革や市町村合併などにより、何回も校名変更が行われている。

**校名変遷** 下手稲小学校(M17) → 下手稲尋常小学校(M28) → 下手稲尋常高等小学校(M43) → 軽川尋常高等小学校(S.4) → 軽川国民学校(S16) → 手稲町立中央小学校(S26) → 札幌市立中央小学校(S26)

**校舎移転** 開進社事務所あと(M17) → 新築移転(M22) → 新築移転(M37) → 火災移転(M39) → 火災移転(S.5) → 新築移転(S49)

#### 2 岩田敏雄先生の略歴

白石村厚別出身、札幌第一中卒→札幌師範本科二部卒→下手稲小学校訓導(S.4～22) → 江別第三小校長→千歳小校長→釧路教育局長→石狩教育局長→網走支庁長→道立図書館長→北海タイムス社長→北海道教育振興会会長

- ◆ 国語科の教師である先生は、情操教育と予習(進学)に力を注ぎ、級全員の文集を作らせたり、上級学校にも多数進学させた。後年には青年訓練所の教育にも傾注した。
- ◆ 北海道の教育は、戦後、管理者と北教組との対立が激しく、学校の正常な運営が行われていなかった。先生は「教師の使命は授業にある」ことを訴えて、正常化に努力した。

#### 3 軽川小との歩み(遺稿集より)

**手稲山登山** 厳しい登山の中に自然を愛する心、苦楽を共にする中から友情や互の強い絆が培われた。

**校舎燃える** 当時校内は、体操や理科観察などで屋外にいたので発見が遅れた。子供達やご真影(天皇の写真)が無事だったことが幸いだった。

**教え子の水死** 全校オタネ浜海水浴で、担任クラスの教え子が溺死してしまい、退職を決意したが、慰留されて残った。

**運動会の華** 毎年海軍記念日に行われた運動会で、父兄からは絶大な人気があった団体遊戯で、「白虎隊」急逝した菊池先生のを引き継いで指導にあたった。

**プールづくり** 防火用水も兼ねてプールを造ることになり、父兄のほか高等科の生徒も手伝い、3年かかって当時としては珍しい学校プールが完成した。

**育成会の結成** 敗戦のショックと世の中の先行きが見えない中、いち早く研究授業と父兄を巻き込んだ「育成会」を結成して注目を浴びた。

#### 4 教え子、同僚などからの回顧

・教師として厳しい中に人間味のある先生だった。受験生は家に泊まり込みで勉強しに行った。

・教え子たちの喜びや悲しみを、我がことのように受け止め、手を貸そうと一生懸命でした。

・人情にも厚く、話術も巧みで、人を惹きつける魅力を持った人でした。

#### 次回の予定

次回(4月17日)は、定期総会と懇親会を予定しております。  
会場は、第1・2会議室です。

## 分科会活動報告

● 「開拓の村・記念館」行事、視察グループ

今年度は、活動はありませんでした。

13 年度の予定として、今年、「開拓の村」は開村 30 周年を迎え、ボランティアも一緒に色々とイベントを行う予定です。それに合わせて今年度は、8 月頃、イベントと蚕の飼育を見て頂きたい、「開拓の村」行きを考えております。

「開拓記念館」

2025 年 4 月より一部休みが入ります。11 月 4 日から 2027 年春迄、全面休みです。

2027 年後、「北海道博物館」（仮称）と名称が変わる予定です。

（濱埜静子記）

● 手稲ふるさと文芸を探る会

2 月 22 日より活動を始め、前半は森田たまの随筆・小説などについて読み合いを行ってきました。現在は有島武郎に関して話し合っておりますが、今回の報告は、森田たまについて茂内氏と野村氏にお願いいたしました。ここでは紙幅の都合上、次の 3 点だけを記します。詳細は配布資料を参照してください。

1. 林檎園はどこ？

親が軽川で林檎園を経営していたということから、森田たまは手稲に非常に関係があり、手稲の住民にとっては関心を惹く作家である。

その林檎園は何処だったのか？ その手がかりとなるのは、次の二つの記述である。

「林檎園は線路に沿って、駅のすぐ近くにあった」

「軽川といふ土地に、1 町四方ほどの林檎畑があって（中略）。家の庭先きを、2 間あまりの小川が流れてみた。隣もうちとおなじ林檎園で、この小川が境界であった。」

我々サークル会員は、その場所を探すべく現地視察を行ったがそれを特定できなかった。皆様に情報提供をいただいて、林檎園所在地を突止めたいものである。

2. 秋田の「二ツ井」

当時の家族制度では、家長の発言が絶対であった。祖母（祖父は先に死）の意向によって決められたたまの婿養子の実家が秋田の二ツ井にある。その二ツ井を訪れる様子の記述に多くの紙面を割いているのは、後に離婚に至るまでの心理的葛藤を説明するための布石であろうか？

（茂内氏の両親はこの二ツ井の出身で、森田たまと同世代の人である。母親と自家用車で東北旅行をした折、両親の生まれ故郷であるこの地を訪れたときのことを思い出しながら、この小説を読んだとのこと）

3. 手稲を PR した森田たま

森田たまはその著作物を通して、北海道を、札幌を、手稲を PR している。その一例として随筆集「明治の女」のあとがきの一部を記す。

北海道には伝統といふものがない。古くからあるのはアイヌの伝説ばかりで、諸国の人々があつまり、新しい文化をきづきあげた。アメリカの初期と似てゐる。風物もアメリカに似てゐる点が多いらしく、（中略）

ロンドンの郊外を訪れた時も、麦畑のあひだに散在する芥子の花の明さや、ゆさゆさと揺れる大樹は北海道そっくりであった。北梅道の文学も殖民地文学である。自分の若き日をふりかへてみると、日本の古典などははるかに遠い存在であって、ロシアの小説の方がずっと身近な感じがした。十二単衣に身を包んで男の訪れを待つ女よりも、あたまたにボンネットをいただいて、楡の樹かげに恋を語る少女の方が自分に近かった。

殖民地文学を自分にはぢない。むしろ誇りとしてゐる。伝統は尊いものだけれど、そこには創作のよろこびはない。私は北海道に生れたよろこびを、いつも心の底にかみしめて生きてきたのであった。

（小田真二記）

＝ ◆ ＝ ◇ ＝ ◆ ＝ ◇ ＝ ◆ ＝ ◇ ＝ ◆ ＝ ◇ ＝

お 悔 や み

当会の草創期に、役員としてお世話いただきました田辺齋氏が、2 月 26 日に逝去されました。会のためにご尽力いただいたことに感謝し、ご冥福をお祈りいたします。